子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1994年11月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'94年11月　NO.62

「94・W・2」安藤義孝

(財)高知市文化振興事業団

人づくりは幼稚園から

佐竹　茂市

高知の教育を語るとき、必ず聞くのが、「戦前は長野県とともに全国的にも知られた教育県だった」、それなのに、現在は、なんと教育的に貧困な県になり下がったことかという嘆きの声である。

私もこの十年来、教育の一端を担う仕事に従事してみて、高知の教育については、多くの問題点があることを痛感している。今回はその一つである幼児教育について考えてみたい。

○全国最低の幼稚園就園率

本県では、平均的に対象人口の二七％が幼稚園に入園し、七三％は保育所に入っている。この比率は全国平均とは、全く逆になっており、長野県とともに全国最低の就園率である。本県では、戦後早くから、幼児の保育については、保育所重視の施策をとってきたので、このような結果になるのは、当然といえば当然であろう。本県のおかれている経済的地理的条件等から、公営の保育所重視策をとらざるを得なかったことは理解できるが、この幼・保入園率の格差は余りにも不均衡であり、これが、小学校以降の初等・中等教育の抱える低学力や非行問題などに繋がっていると思えて仕方がない。

○幼稚園と保育所の違い

そもそも歴史的にも、制度面でも幼稚園と保育所は違った経緯を辿って発達してきており、その機能も内容も違っている。幼稚園は学校教育法、保育所は児童福祉法に基づいてつくられていることで分かるとおり、幼稚園は教育機関（学校）として位置づけられており、保育所は家庭の事情で十分養育できない子供を預かり保育する施設である。ところが実際は両者の機能は同一化しつつあり、それも本県では、子供人口の減少傾向とともに幼稚園が延長保育や給食を行うなど、限りなく保育所に近づいている。このような実状に着目して、幼・保一元化論も出てきているが、「保育所化」する一元化には、とうてい賛成できない。

○幼児教育の重要性

本県の教育を良くするため、教育の各分野で、官民とも、懸命の努力をしていることは評価できるが、必ずしも成果が上がっているとは思えない。その理由は、タテ割り行政の弊害や教育観の違いもあろうが、諸施策に一貫した教育理念が乏しいことが原因ではなかろうか。中でも幼児教育は、初等教育と生涯にわたる人間形成の出発点であり、その重要性はいくら強調してもし過ぎはあるまい。しかるに行政面では、地方の行政組織上は、教育内容について十分指導できる体制にはなっていない。また親には共働きが多いこともあって、長時間、子供を預かってくれる保育所に預けておけば楽だというやや安易な気持ちがありはしないだろうか。

○少子化時代の教育

少子化がますます進み、どこの家庭でも、子供は一人か二人である。昔のように、五人も六人も兄弟があれば、そこに自然に社会ができ、子供は放っておいても育ったものである。しかし今はそうはいかない。子供が少なければ、それに応じた環境を与えてやる必要がある。その環境としては幼稚園が最も適しているだろう。そして親にも預けっぱなしでなく、子供とともに学び、育てるという姿勢が求められなければならない。

できることなら、小学校卒業ぐらいまでは、母親が家にいて育児に専念してもらいたいものである。「三つ子の魂百まで」といわれるように幼児体験は、一生ついて回るものである。母の深い愛情に育まれ、きちんとした生活習慣を身につけた子供は、長じてからも、優しさや思いやりがあり、素直で自主性のある人間に育つことは間違いない。

それと行政には、幼児教育こそ人間教育の原点であるとの認識のもとに、幼稚園重視の施策を早急に実施することを望みたい。現在、園児数の減少によって、大部分の幼稚園は経営危機に直面している。先生方の待遇も恵まれず、夢のない職場になりつつある。先進国にみられるように、全額公費助成こそ理想である。

（学校法人　龍馬学園理事長）

わがふるさと考

竹原　暢子

生まれは大阪、小学校入学は東京、十才までの延べ七年間は現在の中国東北省の長春（その昔の満洲国の首都新京）、十才から十八才までを高知で過ごす、となるとふるさとは一体何処？と改めて考えてみる。広辞林を見る。ふるさとは、自分の生まれたもとの土地、前に住んでいた土地……等々総じて自分の心になつかしい感情を呼び起こす土地ということになるようだ。

〃同じ死ぬならふるさとで……〃戦局の逼迫した昭和二十年三月のある日、この父のことばではじめてふるさとを意識したと覚えている。十才の春のことである。

さて四月三日、両親のふるさと高知へ。高知駅から木炭バスで両親の実家のある長浜へ。ひとまず母方の実家に落ち着く。時まさに百花繚乱れんげ畑が一面に広がり、のどかな田園風景がつづき、視覚で捉えたふるさとは、まこと美しい世界であった。それまで住んでいた新京は、四月に入るまで緑らしき緑が一切ない土地であったこともあってその感激はひとしおであった。緑に対する愛着はここを原点として今に至って、花、樹木、果実、すべてに異常な関心を持つことになったと思っている。当然、新京での生活も振り返れば忘れ難い思いは山ほどある。毎日見ることの出来る地平線に沈む大きな夕日、馬車（現地ではマーチョと呼んでいた）に乗りのんびりと街を行く。これなどは特筆すべきことである。しかしそれにもまして高知での生活は楽しかった。核家族のはしりであった私の家庭が祖父母達の家で一挙に大家族に。また近隣には親類縁者、古くからの知人がたくさん、そしてその人達から土地のこと、生活習慣、また私達子供の知らない両親の子供の頃の事……いろいろ話してくれたものである。これがまたこの土地への親近感、両親への親密感が今までと違ったものになった。ついでながら大家族のゆえに大きなお釜で薪で炊き上げたごはんのおいしかったこと。またそのおこげで作ってくれたおにぎりの香りと味は格別であった。

〃土佐の人はおおらかで人の良い人ばかりだわ〃と近頃はじめて高知を旅した人達から聞く土佐人への評価である。これは多分に気候風土が影響していると見る。桂浜の龍馬像の地に立ち茫洋とした太平洋を眺めると龍馬ならずとも何とも言い難い感情が沸き起こる。日常のささいなこと、そんなことはどうでも良い。もっと大きな事に挑戦しよう、そんな気がするのである。太陽は明るく、緑は豊か、野菜、果物、魚は新鮮……自然に心はおおらかになる。祖父が漁師さんから買って来たと言って、とれとれの鯖を五、六匹バケツに入れて持って帰って来た時は街育ちの子供にとっては驚きであった。

どんな些細なことでも感動する年頃であったこともあって、初めての高知での梅雨、毎日毎日降りつづく雨にびっくり、やっと晴れ上がったのを待ちかねて外に飛び出すとあたりの石垣から赤い小さな〃かに〃がいっぱい出て来ている。これを糸にくくったたくあんでおびきよせ捕える。こんな素朴な遊びが楽しくて時を忘れてしゃがみ込んでいたこともある。帰国して二年目に中学入学、爆撃で屋根に穴のあいた市商で受験、入学すれば校舎はバラック、ガラス窓であるべき窓は障子紙の窓、雨が降るたびにしみが大きくなる。放課後の掃除は床が土なので竹箒……今の学生達には想像もつかないだろうほどの不便で質素な新入生生活であった。けれどもそこで机を並べた友人達から得たものの大きかったこと、もちろん先生方のお教えは言わずもがなである。あの頃は何もなかったね、パンをたくさん食べたかったね、といった話はいつも出るけれどもすべて楽しい思い出にすり替わり、会う度に高知での思い出を語りつづけている。

何年か前、久し振りに天守閣に登ってみた。市内は随分ビルが増えたなと戦後五十年近くを実感したものである。人格形成に大事な時期を過ごしたことで間違いなく私にとってのふるさとは高知であると思う。

両親共他界した今、殊更ふるさと高知がいとおしいこの頃である。

（ギャルリー サロン・ド・パンセ　オーナー／㈱ファインアート会長）

柳瀬（やないせ）文書の発見

公文　豪

昭和三十年六月二十五日、永瀬ダム湛水開始により香美郡物部村柳瀬集落は湖底に沈んだ。小学一年生だった私は、この日の夕刻、刻々水嵩を増す湖面に呑まれてゆく集落を山の上から眺めていた。

それから三十九年後の今年七月、私は野市町の柳瀬誠氏宅で、偶然にも、この柳瀬集落の名主柳瀬家に伝わり、昔から「柳瀬文書」と呼ばれてきた膨大な史料群に出合った。それは目もくらむような中・近世文書で、長宗我部国親・元親・盛親三代の真筆五点、戦国香美郡の状況を生き生きと伝える文書類、また野中兼山の未発見のものを含んだ五通の書状、『土佐国蠹簡集木屑（とかんしゅうもくせつ）』の編者柳瀬貞重の直筆文書、および大量の林政史料等々であった。調べた結果、奇跡的にも、一連の『土佐国蠹簡集』や『古文叢』『南路誌』に収録された柳瀬家と縁者・楮佐古家の古文書の原本がすべて残っていた。国親（覚世）の手紙は、これまで県内に一通しかないと思われていたのが、さらに二通現存していたことも専門家を驚かせた。

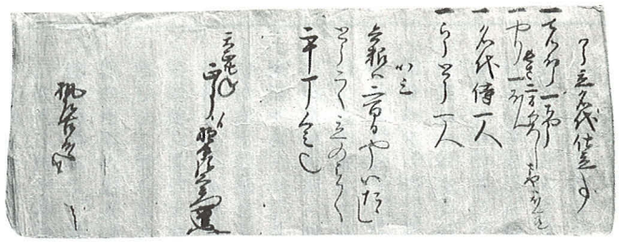
湖底に沈んだ柳瀬集落は、上韮生川と楮佐古川が合流する所に古くから開けた集落だった。柳瀬名主は、ここに土居とよばれる屋敷をかまえ、中世を通じて土豪として発展した。その系図によれば、天文・弘治のころ長宗我部国親に仕え、くだって山内一豊入国の折りには浦戸にこれを出迎えて恭順の意を表した。柳瀬家は、その後代々、笹口御加番役、柳瀬組老役、柳瀬村名本役、上韮生郷大庄屋を務めた香美郡の名家である。

『南路誌』所収「柳瀬氏系図」によれば、天文の頃、柳瀬五郎兵衛に二人の息子がおり、右兵衛孝重が柳瀬家を継ぎ、源左衛門道尋が親姻の楮佐古姓を名乗った。だから、柳瀬文書の中には、楮佐古宛の書状も多い。いまに残る楮佐古家にまつわる有名な伝説は、中世の悲惨な一面を物語っている。楮佐古源左衛門は、天正十四年、長宗我部信親に従って豊後国に出兵し、戸次川合戦において壮烈な討ち死を遂げた。生き延びた郎党ひとり、主人の遺品を携え、海山二百里を越えて楮佐古名の見える八京峠にたどり着く。屋敷にむかって大声で主人戦死の事を叫ぶと、これを聞いた家族はやにわに刀をもって八京峠へ駆け登る。「なぜ主人とともに死ななかったのか」。郎党をその場で切って捨て、死体を釜湯の中に投げ込んで辱めたという。戸次川戦死者の名簿をみれば、主人と運命を共にした無名の中間・郎党の数がおびただしい。横川末吉氏は、人間として扱われなかった郎党の悲劇を切々たる文章で綴ったが、私は、この話がいまなお楮佐古の人々の間で語り継がれていることを確認した。

柳瀬文書の中には、「から立名代仕立事」という楮佐古宛の有名な文書の原本が存在していた（写真）。「一てつほう一ちやう　一やり一ほん　長さ二間くろさやハほん有　一名代侍一人　一らうとう一人　以上兵粮ハ二百日やういたゝしとうこく立のことく二十丁くミ也」とあり、ここにも朝鮮出兵のため、異郷の地へ向かった主従の姿がよみとれる。

さて、柳瀬家では藩政末期に柳瀬貞重を生んだ。貞重は、武藤平道・谷真潮と深い学問的交流があり、彼らと共に土佐の実証史学をうちたてた歴史家である。『土佐国蠹簡集竹頭』は、武藤平道が柳瀬貞重の依頼によって編纂し、『土佐国蠹簡集木屑』全八巻は柳瀬貞重自身が編纂した史料集である。谷真潮が『土佐国蠹簡集木屑』巻頭の序文で「家多伝旧文書」と書いているように柳瀬家は多数の古文書を所蔵しており、その重要なものは一連の史料集にすべて収録されたから、柳瀬文書は藩政時代からよく知られた存在だった。ところが、残念なことに編者柳瀬貞重については詳らかな記録がなく、その生没年さえ不明なのである。今回、せめて墓石さえ残っておればと探したが、ついにみつからなかった。

明治二十一年三月十二日、内閣修史局編修長重野安繹が随行員松浦辰男と共に来県し、四月六日まで高知県下七郡をまわって修史材料を捜索した。その採取文書は一千百四十四通、書籍二百二十冊、系譜以下五十二本を数えた。重野博士は、この膨大な史料を借り上げ、東京で腕の立つ人を雇い、原本に薄紙を乗せ、文字をなぞってすべて写させた。これを「影写」という。この影写本は、いま東京大学史料編纂所に保存されている。この時、柳瀬文書は明治二十五年まで東京へ貸し出された。すべての作業が終わって返却されるとき、県庶務課にいて重野博士の史料収集に協力した松野尾章行（『皆山集』編者）は、所蔵者にたいして高知県が「所蔵ノ古文書又書籍今般於帝国大学既ニ修史編纂ノ参考ト相成候モノニ付尚永世厚保存候様可致事」との証文を下附するよう建言したが容れられず、「実ニ各家へ一言ナク帰ス事甚残念也」と書いている。



長宗我部代官野中弥二衛門が楮佐古家に送った朝鮮出兵についての指令書

松野尾章行の不安は的中した。重野博士が採取した大忍庄研究の基本文献「安芸文書」は、所蔵者が徳島県へ転居してのち、戦災で焼失した。その他の史料も散逸し、現在、所在の分からなくなったものが少なくない。昭和二十四年、永瀬ダム建設計画による用地交渉が始まると、柳瀬家の人々は野市町・土佐山田町・高知市へ分散、転居した。このため柳瀬文書の所在も不明となり、野市町で、誰の目にとまることもなく半世紀近く眠り続けることになったのである。

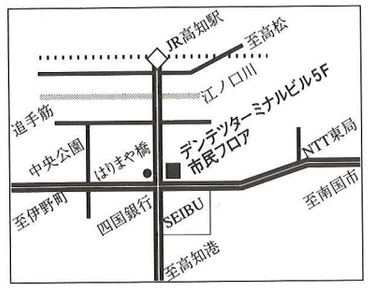
昭和二十九年七月、和歌森太郎・入交好脩氏など中央の学者たちが組織した近世村落自治史料研究会の一行が来県した。メンバーは五日間にわたって県下に残る数々の古文書類を共同調査し、その成果は、のちに『土佐国地方史料』と題して公刊された。柳瀬文書は、東大影写本をもとに、この中に収録された。同年七月二十二日付『高知新聞』は、「民情が歴史の背骨」と題して、調査団と平尾道雄氏ら地元研究者との座談会を掲載した。なかなか含蓄の深い記事で、特に古島敏雄東大農学部助教授（当時）が、「史料は全体として保存されることを願いたい。研究者によって、ある人には価値がなくても、他の人には大切なものがあるので、ささいな紙屑でも全体として保存されたものが一番貴重である。心配なのは町村合併で役場の古い書類が捨てられることである。明治の町村合併にも貴重な書類が捨てられたので、今度の合併にもその轍を踏まぬよう願いたい」と語っているのが印象的である。果たしてその後、高知県でこの警鐘は受け入れられたと言えようか。

柳瀬文書発見についての新聞発表後、物部村山崎に「元親の感状が存在する」との連絡をしてくださった方がある。調べて見ると、これも重野博士が収集した「山崎文書」と呼ばれるもので、元親の真筆に間違いなかった。だが、代が替われば所蔵者の史料価値についての知識は次第にうすれ、柳瀬文書でさえ、私が知った時、長宗我部関係を除いて処分されかねない状態におかれていた。あやうい話ではある。今後も「全体として史料を保存する」ために、百年前に松野尾章行が行った建言の意図をくみ、公的機関の史料調査と積極的な保存措置、県民の意識の高揚がのぞまれる。

（土佐自由民権研究会副会長）

参考文献
横川末吉『地方史を歩く―土佐―』

市民フロアのご利用を
展示や会議に最適！
広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備
所在地　高知市はりまや町一―五―一・デンテツターミナルビル5階
申し込み　㈶高知市文化振興事業団
☎73―4365



心の杖

大野多枝子

「ん……。こりゃあ字になっちょらん」「こんな線を書いたちいかん」「いにや……」、これは今から四十数年前、終戦後間もなく城北中学校の職員室で、私達一年の女生徒数人が書道担当の木戸古径先生から言われた言葉である。三、四日して書き直したものをまた持って行くと先生は額にしわを寄せながら「全然わかっちょらんのう。この前にもいかんと言うたろうがよ。いかん、いかん。もっとけいこしてやり直して来にゃあ……」。こんな先生の言葉を背に廊下に出た私達は「毎日こんなに頑張って書きゆうに、あの先生の言い方、失礼やねえ」「まっことねえ」「ほんでもうやめる？」「うん、あたしはやめる」「いや、あたしは絶対やめん。あの先生にマルを入れらしてみせる」。おかっぱの中学一年の女の子がこんな会話を交わしている中に私も居て「いや、絶対やめん」という仲間に入ってしまっていた。

テレビも塾もない時代で、毎日どうしてもしなければならないことは家の手伝いと学校の宿題だけであったから、夜の時間は本当にたっぷりとあった。暗い電灯の下で、すぐ破れてしまう半紙やチリ紙の裏まで使って何時間も「かな」の基本練習をした。そして翌日学校で「ねえ、ゆうべ何十枚書いた？」と、その数を競い合うのを楽しみにしていた。また数日後、職員室前の廊下で友達が出てくるのを順番待ちしていると、突然、満面の笑顔で頬を染めた友達が飛び出してきて「ねえねえ、すごいろう。あたしマルを入れてもろうたがやき……」と言う声もうわずっている。私達は一瞬息を呑んで「えっ？ 本当？ 見せて、見せて」と彼女を取り囲み「いや本当や。赤のマルが入っちゅう。○○さんすごいねえ。すごいねえ」とみんなで感激して始業のベルが鳴ったのも気付かないほどだった。その日はその他の者はみんな駄目で、先生の言葉は「おまえらあはまだいかん」というだけであった。昼休みに友達数人が集まって「ねえ、私らあも早うマルを入れてもらうよう頑張ろうねえ！」「うん」「うん」と指切りをしたことだった。それから一週間もたたない内に木戸先生の作戦は見事成功して、書道のとりこになった私達に「みんなあ良うなった。良うなった。わしの言うことを聞いて頑張ったきのう」とニコニコして全員に五重マルを入れて下さった。それ以来書道の授業が待ちどおしく、筆や墨の話を大人にするような調子で十二、三才の私達にして下さる木戸先生のお顔をまぶしい思いで見つめていた。その頃から自分の中で「私は書道はどんな事があっても絶対続けて頑張ろう」という気持ちを強く持つようになっていた。

あれから四十数年が過ぎた今、書を通して自分をふり返ってみると、学生として、また職場で、そして書道の世界で、本当に人間として素晴らしい先生方にお会いし書の教えを受けたことは、人の生き方はどうあるべきかを教えていただいたことだと思っている。主人を亡くした今も、そしてこれからも書を心の杖として何とか頑張らねばと思う毎日である。

（清和女子高校講師）

無の境地を求めて

野口　慧子

私がまだ小学生時代、親類の家に書道の先生が、いとこ達に習字を教えに来られていた。何度か見ているうちに、自然とお習いすることになった。まだ小学校二年生で終戦後まもない時である。筆は粗末なものですぐ書きにくくなり、墨も悪く半紙も手に入りにくかった。新聞紙の裏表へ真っ黒になる位練習した記憶が残っている。清書は白い紙でも今のように良質の半紙ではない、それも一枚だけ。その緊張度は小さい心にとって、精神的に負担が大きく苦痛であったが、今思えば懐かしい。祖母が習字について来ては、墨をすったり書き方のアドバイスをしてくれた。その頃から書に興味を持つようになったが、あれからはや五十年近くなる。年に一度仲間達との展覧会がある。何度出品しても、自分の作品ほど拙いものはない。それは練習をしなかったこと、やらなかったのが原因と自分自身よく分かる。その時の挫折感は表現のしようもない。劣等感のようなものが頭の先から足の先まで走り、愕然としてどこかに消えてしまいたくなる。その瞬間は自分しか分からない。そんな時、多くの方のご批評にじっくりと耳を傾け、どんなに苦しく辛くても耐えるしかない。とにかく展覧会でのショックの大きかったことが書に対する一番の思い出のようである。字を格好よく見せようという気持ちを捨て、我が道を行くということに決めた。上達は極めて遅く、後から始めた人はどんどんと良い作品が出来る。師匠に対して、非常に申しわけなく思う。

週に一度の稽古日は、アッという間にやって来る。毎日少しでも練習をしようと心がけながらも、何故かそれが出来ない。毎日時間との戦いである。仕事に追われる現在は、ワープロという文明の利器があることも手伝って、もうやめてしまおうかと、何度も考えたことがある。なかなか決心がつかない。相手がなくても自分一人で楽しめる（苦しめる）書道は、老いても趣味として最高のように思え、現在に至っている。一生懸命になると自分の非力がよく分かり、怠けると心がむなしい。慌ただしい一日が終わって、自分の時間になると、写経や書道をして無の境地になりたくなる。このような繰り返しであるが、書に出逢ったことで充実感のある人生である。これもきっかけをつくってくれた祖母のお陰と、やさしい姿を思い浮かべながら、感謝している。

（土佐病院　栄養管理室）

一つの年輪

森本　栖冬

少年期の私は、いつも、浄机に向かって端座し、書作に耽ける父の背中を見て育ちました。父は、清貧、多忙な役人生活の合間を縫って、硯辺の清香に、心の安らぎを得ていたに違いありません。そのころ、学校から帰るや、脱兎の如く野山を駆け巡っていた私も、父に促されれば、素直に、書の手ほどきを受ける日課をこなし、時折、コンクールに出品して、文鎮などの賞品を手にしては、気をよくしていた、平和な、古き良き時代でした。

その後、戦争に突入し、やがて、敗戦、南方から引き揚げて来た父は、失職し、軍隊を除隊した長男の私と、九人の大家族を抱えて、その日の生活に追われる毎日でしたが、年を経るごとに少しずつ、筆に親しむ日を取り戻し、私と、書談を楽しむ時間も多くなりました。廉直で、いつも貧しさの中に身を置いていた父は、八十六才の生涯を閉じる日まで、展覧会とは無縁に、独り、翰墨を楽しみ、筆を擱くことはありませんでした。

一方、私は、若き日、唯一、出場が認められた書の世界に、少しの自信と郷愁を覚え、研鑽を積みました。〝余生なおなすことあらん冬苺〟の秀句に共感を覚えながら、昭和五十六年、長かった役所勤めに区切りをつけ、その後、書と、二つのかかわり方をして来ました。一つは、まだ未墾の書作家として、書の神髄の探究と書作に、そして、もう一つは、中学校助教諭免許をいただき、書写の非常勤講師として奉職し、生徒の指導育成にと、そのどちらにも生きがいを感じています。書の神髄を、東洋三千年の歴史上の名蹟に尋ね、時空を超えて、高格の士の風姿に接し、心を培うことの楽しさ、また、自分の生命の一部を産み落とす作品づくりに、心を砕き、たまに、手応えを感じたときの歓びと充実感。一方、生徒と二人三脚の日々の中で、夢を追う生徒の書作に声援を送り、生徒が、自分のなし得なかった感動の成果を挙げてくれたときの心躍るうれしさ、など。そして、生徒が、確実に、年輪にした感動と自信に、さらに様々の年輪を重ねて大樹に育ち、風雪を侵して花開く日の訪れを夢見ています。

それにしても、書を機縁に、志高き生徒を含む、数多くの優れた心と出合えたお陰で、私の人生は、大きく拓け、豊かに実りました。今年の仲秋の月は、ひときわ、美しく、人生の曲がり角に差しかかった私は、遠い日に、書との出合いのきっかけを作ってくれた、心豊かな亡父との、この世の出合いに、感謝の想いをはせています。

（財団法人独立書人団会員）

高知県の文化財 (五)

特別天然記念物 ミカドアゲハ

中山 紘一

高知県は黒潮の影響を受けて温暖で平地には照葉樹林が発達しており、南方系の昆虫がたくさん確認されている。一方、北は一五〇〇メートル以上の山が屏風のように連なっていて北方系の昆虫もたくさん見つかっている。

ふた昔ほど前までは高知県は昆虫の宝庫といわれ、県外からも多くの昆虫研究者が訪れていたものである。今ではスギ・ヒノキをはじめとする人工林が大部分を占めるようになって、昔の栄華を残している場所はほとんど残されていない。

高知県には日本産約二三〇種のチョウのうち一一〇種足らずが生息している。

北方系のもので高知県が南限となっているものにはチャマダラセセリ、ツマジロウラジャノメ、ウスバシロチョウなどがある。

南方系のものでは熱帯を分布圏とするヤクシマルリシジミ、タイワンツバメシジミなども海岸部に産する。

ミカドアゲハはナガサキアゲハ、モンキアゲハ、イシガケチョウなどとともにインドシナ系の南方系のチョウである。

愛知県知多半島が分布の東限で、紀伊半島では点々と見つかっている。中国地方では山口県の萩市で見つかっていると言う。四国から九州全域、対馬、種子島、屋久島から南に八重山諸島にまで分布している。

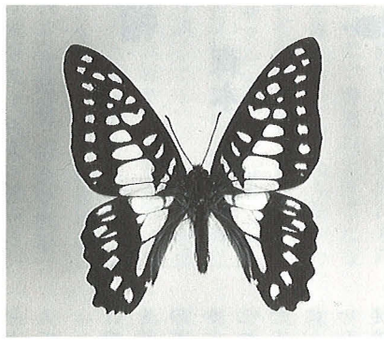
高知県でミカドアゲハが最初に採集されたのは明治四四（一九一一）年で、昭和一八（一九四三）年に高知市の筆山山麓の要法寺、潮江天満宮、潮江中学校付近がこのアゲハチョウの生息地として「高知市のミカドアゲハ」が国の特別天然記念物に指定された。

翅（はね）の表は黒地に淡い灰色がかった青色の帯が縦に走っていて、そのまわりに同じ色の小さな紋がたくさんある。アオスジアゲハに少し似ているが、まず見間違えることはない。

後翅（こうし）裏の基部と亜外線にそってある紋は屋久島から北では黄色で、それより南の地域では赤となるが、四国のものは赤紋のものと黄紋のものとの両方が見られる。

また、翅表の帯は南に行くほど青みが強くなる傾向があり、八重山諸島などでは個体数も多い。

八重山諸島のものはアオスジアゲハと見間違えるほど帯が青く、赤紋もはっきりしているが、高知県のものと比べるとかなり小型である。



ミカドアゲハ

高知県のものは大型で、帯の色が淡灰青色で後翅の紋が赤と黄色の両方の型が同じ場所でもあらわれる点で特異な存在だといえる。

幼虫がオガタマノキを餌として育つことはよく知られているが同じモクレン科のタイサンボクでも育つ。

最近同じくモクレン科のユリノキを食べることも報告された。筆者も高知市五台山でユリノキにミカドアゲハの雌が盛んに産卵しているのを目撃したことがあるがやはり発生の多いのはオガタマノキである。

オガタマノキはホンサカキとも呼ばれ、神事に使われていたので、古くからある神社の庭にはよく植栽されている。

ミカドアゲハは高知県では海岸線に沿って、室戸岬から足摺岬にいたる海岸部や平地に広く分布しているが、産地は局所的である。内陸部や山地では、オガタマノキが植えられている神社などでたまに発生することがあるが散発的で毎年発生をくりかえすまでには至らないようである。

室戸市、佐賀町、大方町入野、土佐清水市や高知市筆山、五台山、小高坂山などには自生しているオガタマノキがあり、発生している個体数も割合多い。

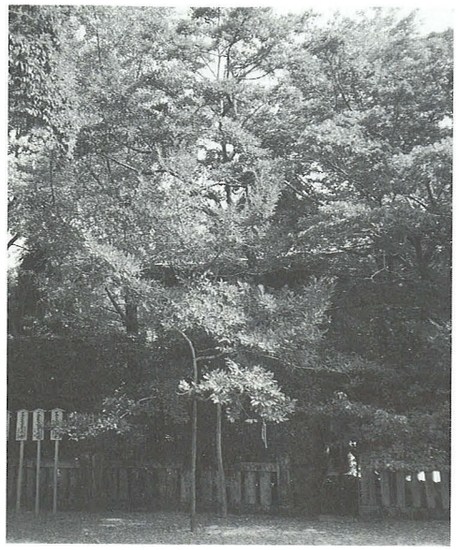
高知市付近で成虫が見られ始めるのは四月下旬から五月上旬で、センダン、ウツギ、イボタノキ、ゴンズイなどの花を好んで訪れる。

母チョウは、食樹の新しい葉の裏に一個ずつ卵を産みつける。卵は淡黄色で、およそ一週間ほどでふ化して二ミリメートルほどの黒褐色の幼虫になる。尾端のほうが白くて小鳥の糞を思わせる色彩と形である。幼虫は食樹の葉を食べて令を重ね成長していく。終令の五令では体長四五ミリメートルほどになり、前胸に黄色で縁取られた目玉模様を持った濃い緑色の幼虫となる。

蛹（さなぎ）になるときは普通食樹から離れて付近に生えている常緑広葉樹の葉の裏で蛹化する。そのまま休眠して冬を越し、翌年の春成虫となるが、一部のものはなぜか夏型として七月に成虫となる。

わが家の庭のオガタマノキは二十五年ほど前に箸ぐらいの幹のものを植えたものだが、土地が気に入ったのか成長が早く、今では胸高直径が二〇センチメートルほどになり、上部の枝は毎年剪定するが新しく出た葉に毎年五月には母チョウが産卵にやってくる。

幼虫がいくつかいるのを確認してからそのまま放置しておくと、アシナガバチがやってきてせっせと肉団子を作って巣に運んでいく。また、蛹になる直前の一時期になると多数のスズメが飛来して幼虫を食べ尽くしてしまう。スズメの襲撃を逃れて蛹、成虫となってわが家の庭から飛び出すのは一頭か二頭程度に違いない。あまりのことにある年残っている終令の幼虫を近くの枝に集めて、スズメよけの網を被せた。数日後見てみると、幼虫は数が半分に減っていて、網の中にまるまると太ったトカゲが一頭舌なめずりをしていたことがある。このほかにもクモや寄生蜂など天敵は多い。



高知市潮江天満宮境内のオガタマノキ

オガタマノキといえば佐賀町の鹿島にあるオガタマノキは見事なもので、胸高直径一メートルを越すものが数本あり、最大のものは一・二メートル以上もある。このオガタマノキもそれだけで天然記念物級の値打ちがある巨木である。

鹿島の林の中でオガタマノキの巨木のはるか梢を飛んでいるミカドアゲハを観察するには林床に仰向けに寝て見上げないと首が痛くなる。

梢近くの適当な葉を選んで一つまた一つと卵を産みつける母チョウの姿が光の具合で黒く見えたり、銀色に見えたりするのを見ていると、人間が平地に生えている林を切り開いて生活の場にする前は高知県の海岸部や平野にはうっそうと林が茂り、どこでもこのような光景が見られたのだろうと考えてしまう。

昆虫たちから見ると人間の住んでいる場所やスギ、ヒノキの人工林は食樹もなく、海と変わらない。わずかに点々と残されている自然度の高い林は大洋に浮かぶ島であって、昆虫たちは島から島へと渡り飛んだり、その島にしがみついて生活することによってやっと種族を維持しているのである。

（高知県文化財保護審議会委員）

高知市文化振興事業団編 **高知のエスプリ** A5判・一六〇頁 定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議編〈高知レポート7〉 **森林と林業の再生** A5判・一五二頁 定価一、〇〇〇円

山本 大著 **幕末の青春**—坂本龍馬の生涯— 四六判・一六八頁 定価一、二〇〇円

依光 裕編著 **珍聞土佐物語 上・下巻** 四六判・三九二頁・四〇八頁 定価一、六〇〇円

鈴木文蕉・井本正人・関根猪一郎著〈高知レポート6〉 **協同組合と地域づくり** A5判・一三六頁 定価一、〇〇〇円

清遠幸男著〈高知レポート5〉 **高知県の工業** A5判・一一二頁 定価一、〇〇〇円

外崎光広著 **土佐自由民権運動史** A5判・四二四頁 定価二、八〇〇円

外崎光広編 **土佐自由民権資料集** A5判・三四四頁 定価三、〇九〇円

土居重俊監修・高知市文化振興事業団編 **土佐弁 土佐日記** B6判・一三〇頁 定価一、〇〇〇円

岡林清水著 **高知県文学散歩** 四六判・二七八頁 定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編 **高知の文化を考える** A5判・一八八頁 定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編 **わがまち百景** A5変・二二四頁 定価一、二〇〇円

筒井広道著 **画帳の歳月** A5変・二五六頁 定価一、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義編 **高知県方言辞典** A5判・七三六頁 定価六、一八〇円

高木啓夫著 **土佐の芸能** B5変・三四六頁 定価四、九四四円

土佐の褐牛（アカウシ）その1

町田　隆彦

【はじめに】

恩師京都大学名誉教授、故上坂章次博士から「高知県には優れた土佐褐牛（トサアカウシ：正式な品種名は高知県産褐毛和種で和牛の一品種）がいる。お前は高知県人であるからこの土佐褐牛を継承していく責任がある」といわれたのが今から十五年程前であった。

その頃、私は大学で動物の人工授精、受精卵移植、体外受精など生殖関係のバイオテクノロジーを中心とした教育・研究を担当していたので、正直いって褐牛の勉強は余技程度にしか考えていなかった。当時の産肉能力検定試験の成績では、和牛総数の一％にも満たない少数集団の土佐褐牛が、九〇％近くを占める黒毛和種よりも発育・肉質ともに凌駕し、子牛価格もかなり高く推移し優位を誇っていた時代であったし、牛肉の輸入自由化の問題でも、脂肪交雑（サシ・霜降り肉）・舌触り（キメの細やかさ）・芳香（風味）など優れた品種的特徴をもつ和牛は、輸入牛肉の影響をそれほど受けるとは思っていなかった。当時は、値段の高い和牛肉から先に売れ、なかには一〇〇g当たり数千円もする松阪の高級和牛肉がよく売れていたバカげたグルメ時代で、脂肪交雑がほとんどなくキメの粗い輸入牛肉には恐れを抱いていなかった。

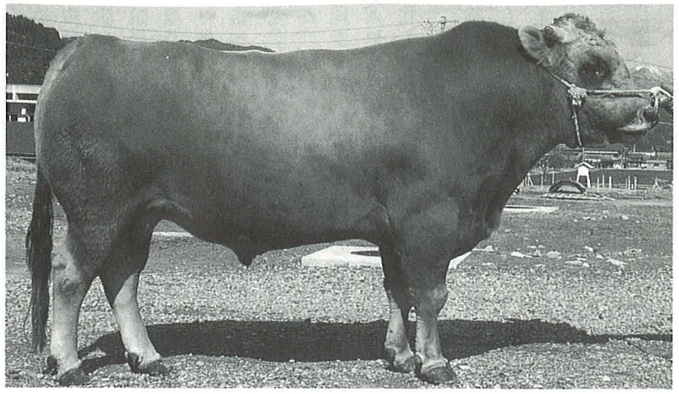
世界の牛の主要品種は、二七四種の多きを数えるが、和牛だけが赤肉（筋肉繊維）の中に細かい脂肪が混入する霜降り肉の特徴をもち、さらに飼育農家の秘伝ともいえる肥育技術によって世界一美味な肉に仕上がっている。来日した欧米の牛肉関係者も和牛の霜降り肉のすばらしい味に驚嘆しているが、牛肉を年間一人当たり二五～四〇kg（アルゼンチンは七〇kg）、さらに牛乳・乳製品を年間一人当たり三〇〇kg（日本は八〇kg）消費する欧米では、コレステロールなど健康上の問題で脂肪離れ傾向が強く、昨年旅行したフランスの一流ホテルやレストランで出された牛肉料理はどれも脂肪交雑がほとんどみられない硬い赤肉で、歯の悪い筆者などはお世辞にも旨いとはいえない肉質であった。世界一魚介類を消費する日本（年間一人当たり七二kg）では、近年牛肉の消費が急激に伸びたとはいえ七～九kg程度の消費に過ぎないので（魚の豊富な高知では六kg）うまい霜降り肉の需要が強く、脂肪交雑の状態・肉色の良し悪しで価格が決定されている。

ところが、平成三年四月の牛肉輸入自由化後、外国牛肉の洪水的輸入量の増加（六〇・五万t）と、さらに具合の悪いことにバブル経済崩壊による不況が到来し消費者の高級肉嗜好が鈍化したため、それまで七〇：三〇で優位にあった国産牛肉のシェアーが現在は四三：五七に逆転し、和牛の枝肉ならびに子牛価格が急落した。そのため和牛生産農家は大赤字続きで、廃業を余儀なくされ、飼育農家戸数は激減している。とくに、土佐褐毛和種などの地方特定品種の少数集団が、その影響をもろに受けて子牛価格は1／2～1／3まで下落した。ここに至って遅ればせながら我々和牛関係者は価格回復の対応に大わらわであるが、不況が長期化した現在では、特効薬がなかなか見つからない。しかし、和牛の肉量・肉質に関する産肉能力の遺伝学的解析、発育・繁殖に関する生産効率の向上、産地直送方式など流通に関する経済形質の開発、消費者にたいする土佐牛のPR等生き残りをかけて懸命な努力をしている。

【和牛の品種】

日本における和牛の品種は四品種であるが、これについて簡単に説明すると、

〔黒毛和種〕　和牛の八七％を占め（約一五〇万頭）全国的に飼われているが、鹿児島・宮崎・熊本・北海道・岩手に多い。また、兵庫県の但馬牛がとくに脂肪交雑に優れ、この系統の牛を肥育した松阪牛（三重県）・前沢牛（岩手県）・飛騨牛（岐阜県）などが高級銘柄牛肉として有名である。この黒毛和種は山口県の見島牛がルーツであり、皮膚・被毛などの資質がすばらしく肉質も最高の霜降り肉を生産するが体格が小格であったため明治三十三年から和牛の主産地である中国地方の和牛に、デボン、シンメンタール、エアシャー、ブラウンスイスなどの外国種を輸入し交雑することによって体格は大きくなり、飼料の利用性もよくなった。しかし、牛が粗野になり肉質が悪くなったため、十年程で雑種繁殖は絶えた。その後、純粋種や交雑和種から発育、肉質を中心に選抜淘汰を繰り返し今日のような世界に誇る黒毛和種の成立をみた。



土佐褐毛和種種雄牛

〔褐毛和種〕高知および熊本県が主産地で飼養頭数は約十二万頭であり、ルーツは韓牛である。そのうち、高知県の飼育頭数は約一万頭に過ぎない。韓牛は体格が貧弱であったため、高知県では外国のシンメンタール種を明治三十九年～大正五年にかけて導入交配した結果、体格も大きくなり韓牛の欠点であった後軀（尻、腿）も充実したが、やはり作業能率・肉質が低下したため大正五年からシンメンタールとの交雑を打ち切り、韓牛の種雄牛で逆交配して改良を重ね今日の土佐褐毛和種となった。とくに高知県産のものは被毛は褐色であるが皮膚は黒く、毛分けと称して角・蹄・眼瞼・鼻鏡・舌・尾房の黒いことが喜ばれ、褐色一毛の韓牛や熊本褐牛よりも輪郭鮮明であることが異なる特徴である。とくに眼瞼の黒はアイシャドウをひいたようで目がパッチリして可愛く、一昨年の大分県における全国和牛能力共進会において名誉総裁である常陸宮両殿下のご台覧の際、華子妃殿下が土佐褐牛を撫でて下さったことが印象的であった（小生も審査員として参加した）。肉質は、皮下脂肪など無駄な脂肪が少なく、ロース芯面積（ステーキの部分）が広く、脂肪交雑も適度でありこれからの消費者のニーズに適合した特徴をもっている。

〔無角和種〕山口県の萩市および阿武郡の在来黒牛にアバーディインアンガス（大正五年輸入）を交配して作出され、増体速度が速く、飼料の利用性に優れているが皮下脂肪が厚く肉質がやや劣るため、近年黒毛和種と交配し肉質改善を図ったが効果があがらず、以前は数万頭飼われていたが現在は一〇〇頭以下となり絶滅が心配されている。

上記三品種は昭和十九年に固定品種として登録され登録協会が設立された。

〔日本短角種〕青森・岩手・秋田県などで約三～四万頭飼育され短角で褐色の牛である。本牛は、在来の南部牛にショートホーン種をイギリスから明治四～五年導入交配し改良を重ね昭和三十二年に一固定品種として登録された。粗飼料の利用性は良く、早熟早肥であるが肉質が外肉と競合し最近かなり減頭している。

（高知大学名誉教授）

第11回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

高知市文化振興事業団では、「第11回写真コンテスト・高知を撮る」と題して、高知を題材にした写真を募集します。お気軽にご応募ください。

〈テーマ〉「高知を撮る」で、高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

〈募集要領〉
- どなたでも、一人何点でも応募できます。
- 254㎜×365㎜（ワイド四ツ切サイズ）以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りで応募してください。
- その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

〈応募受付〉平成7年1月10日㈫～1月31日㈫

〈賞〉特　選　2点（賞状と賞金5万円、副賞）
準特選　15点（賞状と賞金1万円、副賞）
入　選　70点以内

〈入賞作品展〉平成7年3月開催予定の〈写真展・高知を撮る〉に展示します。

〈応　募　先〉
- 高知市文化振興事業団
- 高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店

苦悩する現代山村 (2)

大野　晃

私は、六五歳以上の高齢者が集落人口の五〇％を超え、高齢化で集落の自治機能が急速に低下し、社会生活の維持が困難な状態にある集落を限界集落と呼んでいるが、この限界集落が高知の山村で増加しつつある。

林野率が八三・五％と全国一高い高知県では、高度成長期、山村を中心に人口、戸数の激減にみまわれたが、外材圧迫による林業不振で引き続き人口、戸数が減少し高齢化が急速に進み、独居老人が滞留する場と化した限界集落が増加してきている。

ここでは、後継ぎまで他出し、高齢者が取り残された限界集落で暮らしている老人の声に耳を傾け、限界集落のもつ内実を考えてみたい。

池川町のYさん（七〇歳）は「私たちが若い頃は、製紙の原料の楮や三椏の栽培が盛んでけっこう稼げたのですが、いまは植林した杉に家のぐるりを囲まれる様になり、材木が安くて金にならないので現金収入を得るためには出稼ぎしかありません。若者は安定した生活を求め都会へ出てしまいました。後に残ったものは年寄りばかりです。高齢化が進みこの集落で一番若い戸主は五七歳です。もうこの集落も終わりです」と、取り残され孤立化していく老人の心境を吐露している。

大豊町Dさん（六九歳）は「今日まで地区民がたどってきた道は、戦後の食糧難に応え一生懸命食糧増産に励み、子供を養育しては都会へ都会へと送り出し、大手企業の手助けに専念してきました。気がついた時は過疎で田舎はさびれ農産物、林産物の価格は低迷し山村は何の魅力もなく、激しい労働で残ったものは老人のシワと神経痛だけでした」と、懸命に働いてきた自分の人生が社会的に報われないことを訴えている。

物部村Sさん（七二歳）は「当地区は公共の交通機関がなくタクシーを利用しています。診療所がある村の中心まで車で約三〇分かかり、タクシー代が往復五〇〇〇円かかります。年金生活者が主な当地区の住民にはタクシー代が大きな負担になっています。現在、無料の患者輸送車が一カ月二回走っています。これを有料（普通バス並み）でもよいから国や県の力で最低一カ月四回位走らせ患者でなくても利用できる様にしてもらえれば大変助かります」と、僻地なるがゆえに老人が経済的高負担を強いられている山村の実状を訴えている。

吾川村Eさん（六〇歳）は「山間部集落が過疎のため一つ、二つとこの先消えていくのが目に見えるように思います。この自然がいっぱいで、和やかな生活の営みをつづけてきた私達の郷土が消えていく。これは一種の癌のように思えます。早く手当てをしないと取り返しがつかないことになります」と、消滅していく集落への対策の緊急性を訴えている。

植林された杉に家のぐるりを囲まれ息をこらして集落の消滅を待つ老人。企業戦士を送り出し、その後に残された老人のシワと神経痛。僻地ゆえに経済的高負担を強いられている年金生活者。癌のようにしのび寄る〝むら〟の崩壊。

この限界集落には、林業不振の問題、林業労働者の振動病問題、高齢者福祉・地域医療問題など林業・山村問題が様々なかたちで重層化しかつ凝縮されて発現し、限界集落はいま、現代的貧困の蓄積地域となっている。ここにみる高知山村の社会的現実は、現代資本主義の物質的繁栄という偽像の裏に生み落とされた現代的貧困の偽らざる姿であり、限界集落はまさにその象徴である。

年々増加するこの限界集落をかかえ高齢化率が五〇％を超え、自主財源の中核をなす住民税が激減し、財政の大半を交付税に依存しつつ高齢者福祉、地域医療関連の支出増のなかで財政維持が困難な状態となっている自治体を私は「限界自治体」と呼んでいる。人口将来予測によれば高知県では二〇〇〇年に二つ、二〇〇五年に三つの自治体が高齢化率五〇％を超す。この限界自治体化が山村問題の深刻化に拍車をかけ、住民生活に暗い影を落としている。

次回では、限界自治体化によって存亡の危機に立たされている山村自治体を環境保全問題とのかかわりでみることにする。

（高知大学人文学部教授）

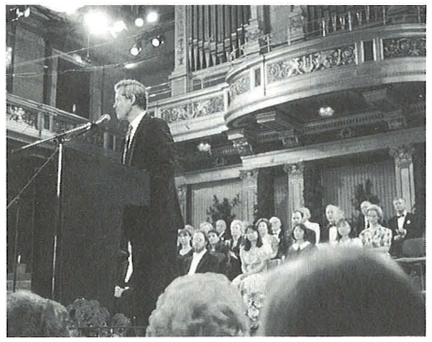
演奏会の楽しみ再発見　その③

宮田　信司

ウィーン国立音楽大学は教授も冗談で「どこに何があるか分からない」と言うほどその建物はウィーン市内に点在している。おのおの手頃なホールとよい楽器を備えていて毎日のように学生達による演奏会が行われている。各教授のもと年に数回はクラスごとに演奏会が行われるのである。それはコンクール出場や卒業試験の為のリハーサルを兼ねていたり、テーマを決めての連続演奏会だったりして一般にも公開されている。観客は二十～三十人といったところで少ないが演奏会前には高名な教授自らが挨拶に立ったりして非常に親切な感じがする。観客も心得ていて学生達には普段より多めの拍手を送り、一、二度のカーテンコールにより自信を付けさせようという配慮が伺える。

昨年の五月には四年に一度の「ベートーヴェン国際ピアノコンクール」が楽友協会ホールで十一日間にわたって行われた。世界九カ所での予選を通過した三十八名がその技と音楽性を競った。その名が示すとおりほぼ全曲ベートーヴェンによる（一曲のみ新作あり）コンクールであり、朝から晩まで同じ作曲家の曲を聞き続けるには非常に忍耐力がいった。日本人も随分出場していて、皆良く訓練されそつがなく、優秀な演奏だったが個性、ハーモニー感に乏しいと感じた。これは昔から日本人の演奏の欠点としてよく指摘されている事であるが、今回様々な国籍の若者の演奏を聞き比べて改めて自覚した次第である。二次予選を通過した彼らには様々なアイデアとカラーがあり、既成概念にとらわれない自由なベートーヴェンの世界を展開してくれた。本選は大ホールが熱心な満員の市民で埋まり深夜までその結果が出るのを見守った。

しかし学生達には甘かった観客もすでにコンクールをとってデビューをはたした人には厳しい耳を持つ批評家に変わる。若手で甘いマスクを持ち日本では人気が有るピアニストの演奏会ではこんな事があった。プログラムには「昨年ウィーンでのデビューで大成功を収めた」と書かれていて当日も満席であったが、今回どうも二番目に弾いたベートーヴェンがウィーン人達のお気に召さなかったらしい。意志が定まらず宙に浮いたような軟弱な解釈に我慢ならなかったらしく、皆お尻がもぞもぞしてしまい後半のシューマンは立派な演奏だったのにもかかわらず拍手は少なく、アンコールも要求しないでさっさと帰るというなかなか手厳しい評価を下していた。このように観客はプロとアマの違いに対してはっきり自分の意志を持っているようだ。



ベートーベンコンクール本選会

また一方で世界的にはあまり評価を受けていないがウィーンでは非常に人気があるという人もいる。オレグ・マイセンベルグというピアニストもそのうちの一人で、常にチケットはすぐに売り切れ演奏会も異様に盛り上がる。独特の解釈とテンポ感で非常に癖のある演奏スタイルだと思うが、その怪しげな魅力に古き良きウィーンの香りが感じられるのか皆とりこになるのである。

演奏会の数だけでいえば今や東京の方が多いし有名演奏家の来日も多い。ポリーニもブレンデルも何年かに一度は聞ける。しかし彼らにとってもウィーンはやはり特別の都市なのだろう。そのプログラムにもアンコールの選曲にもウィーンを意識しているのが充分伝わってくる。

ウィーン滞在十カ月の間にオペラ、ピアノを中心とした演奏会に通い詰めた私は、観客としての経験はこれまでになく多くできた。これにより人は何を演奏会に求め、何を楽しみにわざわざ会場に足を運ぶのかやっと理解できた気がする。これはウィーンであろうが高知であろうが変わりはなく、演奏する側には観客に楽しんで頂ける演奏会を提供する務めがあると再認識した次第である。

—完—

（ピアニスト・高知大学助教授）

建築と都市の美しさ

出江　寛

一級建築士は建築家か

【昇華】

芥川竜之介は文章について次のように言っています。「文章の中にある言葉は辞書の中にある時よりも美しさを加えていなければならぬ」。これを建築に置き換えるなら、「建築の中にある材料は仕様書（ＪＩＳ）の中にある時よりも美しさを加えていなければならぬ」ということになります。つまり、単なる建築材料を美しいものとして建築の中に昇華させなければならないということです。それができるか否かが、その建築を設計した設計者が単なる技術者（一級建築士）か、建築家かということになるのでしょう。だから、建築家といわれる人は、技術者であると同時にアーチストでなければならないということになります。画家、音楽家、彫刻家、作家等々、「家」のつく人達は皆、アートに関係する人なのです。

一般に建築の設計者は、いい空間をつくろうとする時、その建築に少しでもリッチで美しく見える材料（例えば石等）を使おうとします。この美しく見えることが問題なのです。美しく見えるものだから、本当の美とは何であるかを深く考えることを怠り、物質的にリッチだから美しいと勘違いしてしまいます。美しい材料はそのまま空間に影響し、設計者が美しい空間をつくろうとする努力をしなくても、安易に、リッチで美しく見える空間を得ることができるからです。例えば、外装にしろ内装にしろ、立派な石を使用すれば、それだけで唯唯諾諾とリッチな空間が得られます。本来、リッチと美しいとは全く別の事なのですが、多くの場合、リッチで美しく見える空間を見ると、それを美しいと錯覚するのです。そしてその反対に、プアーな材料を使うと空間はプアーになる、という至極当たり前のことをずっと繰り返してきました。そして建築が美しくならないのは、予算（金）がないからプアーな材料を使わざるを得ないせいだとしてきました。しかし、この安易でプアーな心を改めるべきでしょう。

芥川竜之介よりも更に厳しい姿勢でものづくりをしたのが利休でした。利休はことさら質素な（一般的には悪い）材料を使って、美しく、精神性のある空間を創り出しました。それが国宝の「待庵」です。利休は、現代の建築仕様書（ＪＩＳ）にとうてい合格することのない特に質素な材料で、あの美しい待庵をつくったのです。今、リッチな材料にのみ依存した他力本願的なデザイン思想を早く止めるべきだと思います。

【俗性】

蕪村は「俗語を用いて俗を離るるを尚ぶとす」としています。俗とは、建築材料でいうなら、俗っぽい材料ということになります。言い換えるなら、ポピュラーで安価な材料、になるのでしょう。俗の本質は面白いということですが、反面、俗性は品が悪い。しかし、蕪村の絵も俳句も、俗世をテーマとしながら品が良い。この俗世を離れるためには、本を読み、漢詩をたしなめ、と言っています。利休は俗っぽい材料で美しい待庵を造りました。バブルのはじけた今、建築はかくあるべきではないでしょうか。

【家と庭】

昔から、いい家庭とは家と庭と書きます。小さくても、美しい庭がなければならないことになります。マンションでもバルコニーに植栽ができます。

かつて、建築家と呼ばれる人達は昔から庭の設計が大変上手でした。いい家を造りたいと思われる方は、一級建築士（技術者）ではなく、建築家にお願いされるべきでしょう。でなければ、美しく潤いのある都市も建築も出来ないと思います。

絵にならない現代都市

現代都市は随分奇麗になってきましたが、美しくなってきたとは思えないのです。その証拠に、現代都市を絵に描こうという気にはならないでしょう。昔の古い街、例えば京都や倉敷、奈良等は絵になりました。なぜ、現代都市や建築が絵にならないのでしょうか。それは、先に述べましたように、一級建築士（技術者）による街づくりであるからです。

現代は全てに於いて経済性と合理性（利便性）のみを追求するあまり、人間としての心とか情けといったものを忘れてしまったのです。それをデザインについて言いますと、四角い豆腐に穴をあけたような建築となりました。そして「シンプル・イズ・ベスト」という、経済性のみ追求する人達には都合のよい言葉が生まれました。この、経済性と合理主義のもとで生まれた建築に、私はいまだに本当によい建築を見たことがありません。このシンプル・イズ・ベストを言い換えるなら「シンプル・イズ・ナンニモナッシング」の、精神性（心）のない建築や都市をつくっていったのです。このことが、今世紀の都市や建築の失敗なのです。二十一世紀は絵になる、情のある都市をつくるべきだと思います。

例えば、我が国の七〇％（七割）の住宅を造るプレハブメーカーの団地を見ればおわかりになると思うのですが、どれも画一的な建物が並んでいて、退屈でつまらないでしょう。樹を植え、水を流してみても、どことなくうそ淋しい。このうそ淋しさはどこから来るのでしょうか。それは、形態だけではなく、そこに使われている建築材料にも起因しているのです。

それらの材料は奇麗なだけで、美しく、ウェットな材料ではないのです。奇麗ではあるが、それらはドライで薄っぺらく、うそっぽいのです。例えば、大理石のように見えるプラスチックや、煉瓦のように見える煉瓦タイル、高級そうな木目をプリントしたベニヤ板、革のように見えるビニールレザー等々、どれも上等（高級）そうに見せようとする欺瞞の心に満ちた材料が使われているから、うそ淋しい街に見えるのです。

昔の建築材料は正直だったのです。木の柱や梁、板壁や天井、土壁等、それらは掘っても掘っても木は木であり、土は土でありました。表面材と内面材とが変わることはなかったのです。利休の師である武野紹鷗は、わびについて「正直で、慎み深くおごらぬさまをわびという」と教えています。この正直であることが大変大切な心であるのですが、浅はかな人達は、少しでも建築を高級そうに、立派そうに見せ、高く売りつけようとするし、建築主も立派に見せ、自慢したいという心が働いて、うかつにも、偽物の大理石や革やプリント合板等を使うことになるのです。その結果が、あのうそ淋しいプレハブ団地になるのです。

日曜日や祭日ともなれば、都会の人達は京都や奈良、倉敷等の古い街へ、そして、海や山の自然を求めてドッと出かけます。それは、心の潤いを求めて出かけるのです。これらの古い街は、どんなに貧乏な人の家もお金持ちの家も、木、土、石、瓦のウェットで正直な材料で出来ています。このことが、数寄の美学である「古びる」＝「古美る」街をつくっていったのです。「古美る」とは、古くなるほど美しくなる家であり、街であるのです。それは、日本の古い街に限らず世界の古い街を思い出していただければ分かることと思います。プレハブ住宅は、果たして古くなればなるほど美しくなるのでしょうか。私にはそうは見えないのです。二十一世紀は絵になる美しい街をつくりましょう。

（建築家）

第11回 高知市都市美デザイン賞　推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を選出しています。
身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】高知市内にあって平成６年１月１日から平成６年12月31日までに完工した建築物・建造物

【推薦受付】
平成６年12月１日～平成７年１月31日

【推薦】
どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき１通に１件とします。

① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
② 推薦の理由
③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

【送り先・問い合わせ先】
高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係

聞く　聞く　聞く

文化セミナー・94から

樺山紘一氏「人間―自然と文化のあいだ」

近年の森林破壊の進行で逆に、森の持つ意味が再認識されています。かつて森は燃料の供給源や狩猟の場、キノコなどの採集の場として、人類登場以来、人間を支えてきました。最近言われる、森林のダムとしての役割、酸素の供給源、森林浴の効果などを持ち出すまでもなく、森は人間の生活と密接に関わってきたのです。

さて、私たちはヨーロッパと聞くとすぐに都会をイメージしますが、パリにはブローニュの森があり、ロンドンは大きな森のベルトで取り囲まれています。有名なウィーンの森をみてもわかるように、都市は森に囲まれていることに気付きます。今から二千年前のヨーロッパは約八〇%が森林に覆われていました。ヨーロッパの歴史は、森の中でどう人間として暮らすかという、森との戦いの歴史でもありました。しかし、時代が進むにつれて徐々に森は減り、十八世紀ごろには約二五%までに減少しました。ここで初めてヨーロッパ人は森を切り過ぎたことを知ったのです。また、十九世紀の人々にとっては、ヘンゼルとグレーテルの昔話のように、森は迷い込んだら出られない所でしたが、燃料としての森の資源は枯渇しつつありました。人々は森を作り直そうという運動を始めました。現在のヨーロッパの大都市周辺の森はこの頃に作り直されたものです。

このようにヨーロッパの人々は、自分たちの歴史の中で、森の重要性を学びました。ひるがえって、我々日本人はどうだったでしょうか。日本の国土の六三%は森林です。縄文時代の人間は山中で生活していましたが、弥生人たちは平野部で農耕を始めます。その結果、平野部は弥生人、山間部は縄文人という領域区分ができ、二つの生活方法が生まれました。そして、互いに相手の領域を侵さないという、暗黙の了解ができたのです。また、私たちは山は神が住まう所であり、あるところまで行ったら、入ってはいけない聖域なのだとも考えました。山の木を切ることは、これまでの森と人間との関係を切ることだと考え、日本人は森林にあまり手を付けなかったのです。

同様に、川も人にとって特別の意味を持つものです。ヨーロッパの川にはほとんど河原はありません。ヨーロッパの川は一年を通して水量が変わらず、河原はできにくいのですが、日本の川は季節によって水量の差が大きく、河原ができやすくなっています。河原はその構造上、誰のものでもない公共の広場のような性格を持っているため、歌舞伎や猿楽など、日本固有の文化がここから生まれました。いつもは水が流れていない河原は、周囲の人々の共通の財産であり、自由な表現の場であったのです。

このように、様々な国によって森や川のもつ意味は違っています。しかし、森や川や海など、すべての自然に対して私たちは様々な意味を見出してきたのです。自然を破壊し、自然を失うことは、経済的な資源を失うだけでなく、文化をなくしてしまうことであります。経済的に損だから自然を守ろうという考え方だけでなく、自然の持っている意味を失わないために自然を守り育てるのだという考え方が重要だといえます。人間は自然と文化の間に挟まれて暮らしてきたのだし、このような自然の中で培われてきた、私たちの考え方、歩き方、暮らし方を学び取ってゆくことが、今私たちに求められている大きな課題ではないでしょうか。

（編集部）

第10回高知の映像コンテスト入賞作品（昭和45年10月撮影）

高知を撮る

神祭相撲　高松　是寿

親の権威

風俗歳時記

時代とともに親子関係が変化していくのは当然であるが、今日ほど親の権威が失墜した時代はない。教育の重視や物の豊かさを反映して、子供は大切にされるが、その育て方はモヤシをつくるようなもので、家庭における基本的なしつけが失われ、人生の危機管理に対する訓練がされていない。世の親たちも、それを当然としているように見える。

たしかに今日の子供は、知的な学力は高い。だが精神的には全くひよわである。失敗をおそれない冒険心もなければ、挫折から立ち上がる強靱さにも乏しい。全般に人間の「練り」が足りない。いまさら「艱難汝を玉にする」などという気はないが、どんな人間も、生まれてから死ぬまで、全く試練なしに順風満帆で過ごせるものではなかろう。長い一生には必ずや幾度かの試練があるのだ。そのときモヤシ人間では、挫折の淵から立ち上がれない。萎えてしまうだけになる。

さて、こうした親の権威の喪失、つまり教育者としての地位低下は、どうしてもたらされたのだろうか。ある人は、戦後の民主化が原因だという。果してそうか。

だとすると、世界の民主国家で同じ状況が起こっていてもおかしくない。だが事実はそうではない。アメリカにおいてもイギリスやフランス、ドイツなどでも、結構家庭教育は健在である。親の権威も、日本に比べてはるかに強く残っている。

どうみても、日本でのそれは極端過ぎるように思える。もっとも気掛かりなのは、親の側の主体性のなさである。戦後の価値観の変化にしても、変わることはいいが、変わるのには〈主体〉が必要だが、それがあいまいにされた変わり方は、結局は思想、価値観の喪失で、これを一番失って混迷しているのが、現代の親ではないか。

（晋）

「さわやか手だすけセンター」

ふれあい社会を夢見て

片岡　朝美

高知県は全国でも第二位の高齢化県です。しかしながら、施設による介護の量的な不足、在宅指向、核家族化による家庭の介護力の低下、向こう三軒両隣的なコミュニティの崩壊等で、老いの生活をどのように過ごせば良いか、限りなく不安に思っています。

今私達は、地域に住む住民として、高齢者や障害を持つ人が生きがいを持ち、安心して生活できる社会を築くための努力をしなければならない時を迎えています。

「さわやか手だすけセンター」は、高齢化社会到来に向けての住民互助型団体として、平成六年四月より活動を開始しました。手だすけを必要としている方（利用）、ボランティア（協力）と、資金援助をして下さる方（賛助）が会員となって、互いに助け支え合っていける地域社会をつくりあげることを目標とし、次のような活動をしています。

(1)高齢者等を支える心温まるボランティア活動（家事援助・身体介助）等
(2)研修会・講演会等を通し、会員に限らず地域住民の知識や技能を高める
(3)広報発行によりボランティアに対する地域の人達の意識の高揚に努める
(4)活動資金確保のためのバザー実施

みんなのために、人や地域や社会のために、そして自分自身のために――。あふれるやさしさのふれあい社会を夢見て、ご一緒に活動しませんか。

連絡先　高知市和泉町二―一五
電　話　〇八八八―二一―〇五五〇

「知己の会」

別れたあとがさわやかで

兵頭　襄一

「この会は追手前高校ＰＴＡ広報誌をこよなく愛し、それに関わった者を会員とする」会則にはこんな言葉があります。

私たちの子供が追手前高校に入学した昭和六十年前後はＰＴＡ活動華やかな頃でした。そんな中でＰＴＡ会報を年三回編集発行していた広報部はいつも部員集めに苦労し、編集発行でも苦労（楽しく）していました。子供たちと共に卒業しても、みんなで一緒に過ごした時間がなつかしく、楽しく思い出されて親睦会を続けながら六十二年に会則を定めて「知己の会」として発足しました。「知己」の名は愛媛県砥部町に住む詩人坂村真民さんの「万年の知己」の詩から頂きました。

会則に謳っていた会報の発行も一昨年から始めています。表紙には広報誌でいつもお世話になった片木太郎先生の版画をいただき、それに色づけしたものです。お陰様で私たちの拙い丈を光らせていただいています。

子供たちが縁となり出会った私たちです。しばらく会わないとなつかしさがふくらみ、お声が聞きたくなり、会いたくなってきます。なつかしさがふくらむのはいいですね。人間に大切なのは「なつかしさ」なのですから……。

これからも万年の知己として楽しい集いを重ね、みんなでいい顔になって生きてゆきたいものです。

連絡先　南国市下野田三九九
電　話　〇八八八―六四―一三六〇

「游筆会」

書の魅力にひかれて

片岡　健次

高知市立中央公民館に市民学校ができたのが昭和二十六年で、その後、書道教室が始まったのです。昭和四十七年に田村龍水先生に指導を受けたものたちが、講習会修了後も引き続き田村先生の教えを受けたいと実現に向けて頑張っていましたが、昭和五十年になって游筆会という名前をつけ正式に書を学ぶ会として発足したのです。

それ以来今日まで続いているのですが、いつも三十名前後の会員が田村先生のもと、熱心に、なごやかな中にも厳しい指導を受けてきました。ある時は一泊で練成会を窪川の岩本寺で行った事もありました。

先生のご指導のよろしきを得て、既に筆の友書道会の師範の資格をとった人が十六名もおります。毎月四回、土曜日の午後五時から公民館の和室に集まって先生より直接手をとって教えていただき、二十日の提出作品も選んで頂いています。もう二十年も続けているベテランの先輩会員も、新しい人たちに親切なアドバイスをしてくれています。そして、二年に一度游筆会展として会員がそれぞれ自分の作品を展示して一般の方に見ていただき、互いに批評しながら自らの腕を確かめる機会としています。

年末には忘年会を兼ねた昇段者のお祝いの会を催し、愉快に踊りやカラオケなど楽しい余興に一夕を過ごすこともあります。

連絡先　高知市潮新町一―一〇―二三
電　話　〇八八八―三一―〇五七四

「白鳥会Ｂ組」

永遠の若さを

沢本　栄

高知市老人憩所で社交ダンスの講座が十五年前に開講されました。この講座は一年で修了ですが、その後も社交ダンスを続けていきたいとの希望で、ＯＢ会が誕生し「白鳥会」と名付けられました。現在では白鳥会Ａ組・Ｂ組、愛好会としてあひる会・かもめ会、初心者の「社交ダンス講座」の五クラスがあり、それぞれ自分の希望するクラスで楽しく元気に踊っています。

年齢は六十歳から八十歳までですが、六十名の男女が毎週木曜日の午前十時から十二時まで、和気あいあいと過ごしています。〝いつまでも若々しく元気で踊ろう〟の目標に向け、上手下手に関係なく個性に応じて踊ればよいのが、この会の特徴です。また、指導者の方も、基礎から応用までを熱心に指導して下さり、各々の技術もめきめき上達しています。

年一回の老人憩所の年忘れ演芸大会に日頃のレッスンの成果を披露するほか、他の社交ダンスの発表会に出演したり、クラスでのダンスパーティーを年に数回開くなど、お互いの技術の向上と親睦を深めています。

社交ダンスは健康と、若返りにもなります。皆様もご一緒に楽しみませんか。

連絡先　高知市百石町三―一―九
　　高知市老人憩所
電　話　〇八八八―三一―三三二四

散歩の途中で

橋の袂の楠の大木と、バックに写る白壁の倉庫群がよく似合った「一文橋」時代の波にはついに勝てず、幅員27ｍの近代的な姿に一変しようとしている。楠は既に近くの一文橋公園に移設、橋本体も平成６年度末には完成の予定。

風信

水一滴

ことしの異常渇水で、各地では掘り抜き井戸が急造されたと聞くが、むかし私の生家にも掘り抜き井戸があった。夏がくると、井戸の中でフナやコイを泳がせて、釣りの真似ごとをして父に大目玉をくらったことがある。それも今ではなつかしい記憶だ。

――遊び疲れてのどが渇くと、釣瓶（つるべ）で水をくみあげて一気に飲んだ。えもいえぬ微妙な味。それに夏は冷たく冬は暖かいから、山下清（きよし）流にいうと大将と兵隊ほどの違いがある。

ところで今から三十年ほど前に、亡兄が生家を改築した時に井戸を潰したが、当時、各地にあった掘り抜き井戸はあらかた姿を消した。（物質文明云々はあげつらうまい。）

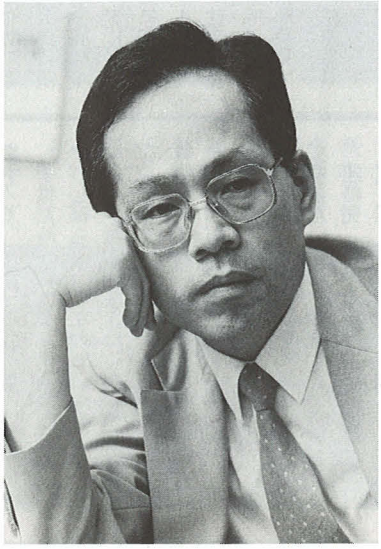
さて、水といえば、遙（はる）か奥山でこぼれた数滴があつまって、落葉の匂いをのせて渓谷を下り、ダムに注（そそ）がれ、やがて私たちの家庭にとどく。水道の蛇口を開けると、水はほとばしり出るが、その水はふたたび水のみなもとへ帰っていくことはない。さながら一回性の私たちの人生のように……。

話は変わるが、曹洞宗の始祖、道元は、弟子や修行僧に、「使い残した水はかならず桶に戻して、もういちど使うように。万物すべていのちがあるから。」と訓戒したのが〝永平半杓の水〟の語源であるが、その永平半杓の水を忠実に守ったのが、精神医学界の泰斗で、本県出身の森田正馬氏である。氏はまい朝顔を洗った水で廊下の拭き掃除をし、残った水を庭木に撒くことを日課にしていたという。

（混・沌）

(財)高知市文化振興事業団設立10周年記念講演会

佐高信の 時代を読む眼



激動する現代社会の中で、真に豊かな社会を築き、意義ある人生を送るためには、何が必要なのか。
豊かな見識に裏打ちされた、シャープな評論で定評のある、評論家・佐高信氏の政治、経済、文化の面からの検証を通して、これからのあるべき社会を考えます。

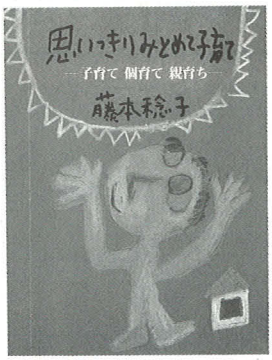
11月30日(水) 午後6時30分～
ＲＫＣホール 〈入場無料〉

佐高　信（さたか　まこと）
1945年山形県に生まれる。
慶応義塾大学法学部卒業後、山形県の高校で教鞭をとる。
のち、経済誌編集長を経て、1982年評論家として独立。
広い視野に立脚し、資料と事実を踏まえた切り口は定評があり、
その歯切れのよい評論で多くの読者を魅了している。
主な著書に、『日本官僚白書』『「非会社人間」のすすめ』
『逆命利君』『佐高信の筆刀直評』などがある。

●お申し込み方法
入場整理券が必要です。電話又は、はがきに住所、氏名、電話番号を明記の上、文化振興事業団までお申し込みください。折り返し入場整理券をお送りします。なお、定員（500名）に達し次第、締め切らせていただきますのでお早めにお申し込みください。

主催：(財)高知市文化振興事業団

新　刊



思いっきりみとめて子育て
―子育て 個育て 親育ち―

藤本 稔子著 四六判・並製本・352頁・定価1,600円

三十八年の豊かな保育経験をもつ元園長がつづる素顔の子どもたち。子どもを知り、愛し、認め、働きかけをするなかで、どの子も大きく伸びていく。

内容
Ⅰ 子どもと心を結びあう
Ⅱ 生活は育つ基盤
Ⅲ 豊かさとたくましさを
Ⅳ 集団の中で育つ
Ⅴ よい環境を

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町５丁目２番３号　TEL (0888) 73－4365
郵便振替 01680-5-14869